

アメリカ陥落4

東太平洋の荒波

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画
地図
平面惑星
安田忠幸

目次

プロローグ	13
第一章 コロラド・スプリングス	23
第二章 Tu・95 ッベア	39
第三章 針路、東へ	69
第四章 シアトルへ	94
第五章 リトル・トーキョー	120
第六章 七星作戦	147
第七章 きりさめ	173
第八章 島津の退き口	198
エピローグ	210





登場人物紹介

////【日本】////

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

どもんこうへい
土門康平 陸将補。水陸機動団長。コードネーム：デナリ。

〈原田小隊〉

はらだたくみ
原田拓海 三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。コードネーム：ハンター。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。田口のスポッター。コードネーム：ヤンバル。

〈姜小隊〉

かんあやか
姜彩夏 二佐。元韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。コードネーム：ブラックバーン。

〈訓練小隊〉

こまどりあや
駒鳥綾 三曹。護身術に長ける。コードネーム：レスラー。

《水陸機動団》

しばひかる
司馬光 一佐。水機団格闘技教官。

〈第3水陸機動連隊〉

ことうまさのり
後藤正典 一佐。連隊長。

ごんどうじ
権田洋二 二佐。副隊長。

さかさしんのすけ
榊真之介 一尉。第1中隊第2小隊長。

くどうしんぞう
工藤真造 曹長。小隊ナンバー2。

●海上自衛隊

《北米支援艦隊司令部》

いのうえしげと
井上茂人 海将。護衛艦隊司令部幕僚長。

《第四護衛隊群》

•ヘリコプター搭載護衛艦DDH-184 “かが” (二六〇〇〇トン)

まさのしろうご
牧野章吾 海将補。群司令。

はたののぶたか
秦野信孝 一佐。艦長。

なかのまさみち
仲野正道 一佐。幕僚長。

喜久馬真子 二佐。戦艦情報幕僚。

・むらさめ型護衛艦 “きりさめ” (六〇〇トン)

松浦伸吾 二佐。艦長。

若林海斗 三佐。副長。

《第4航空群》

〈第3航空隊第31飛行隊〉

遠藤兼人 二佐。飛行隊長。

佐久間和政 三佐。機長。

木暮楓 一尉。副操縦士。

野本理沙 三曹。

●航空自衛隊

村谷澄弥 一佐。北米支援艦隊司令部航空幕僚。

〈第308飛行隊〉

阿木辰雄 二佐。飛行隊長。TACネーム：バットマン。

宮瀬茜 一尉。部隊紅一点のパイロット。TACネーム：コブラ。

●統合幕僚部

三村香苗 一佐。統幕運用部付き。空自E-2C乗り。北米邦人救難指揮所の指揮を執る。

●在シアトル日本総領事館

土門恵理子 二等書記官。

●ロスアンゼルス総領事館

藤原兼人 一等書記官。

////【アメリカ】////

●^{N S A}国家安全保障局

エドガー・アリムラ 陸軍大将。NSA長官。

●エネルギー省

M・A (ミライ・アヤセ) 通称・^{ソーサラー}魔術師 “ヴァイオレット”。Qクリ

アランスの持ち主。

レベッカ・カーソン 海軍少佐。M・Aの秘書。

●空軍

テリー・バスケス 空軍中佐。終末の日の指揮機“イカロス”指揮官。

●FBI

ニック・ジャレット 捜査官。行動分析課のベテラン・プロファイラー。

ルーシー・チャン 捜査官。行動分析課新人。

●ロス市警

カミーラ・オリバレス 巡査長。ヴァレー管区。

●テキサス州郡警察（ノーラン郡）

ヘンリー・アライ 巡査部長。

オリバー・ハッカネン 検死医。

●“ナインティ・ナイン”

フレッド・マイヤーズ UCLAの政治学准教授。通称“ミスター・バトラー”。

ジュリエット・モーガン 動画配信ストリーマー。通称“スキニー・スポッター”。

●レジスタンス

リリー・ジャクソン 元陸軍中尉。ヘンリー・アライとは陸軍時代の同僚。

●その他

にしやまじょういち
西山 穰一 ジョーイ・西山。スウィートウォーターでスシ・レストランを経営。

ソユン・キム 穰一の妻。

ちよまる
千代丸 穰一とソユンの息子。

アンソニー・キム 韓国系アメリカ人。

ダニエル・パク 下院議員。カリフォルニア州の大統領選候補。

ウメコ・アライ ヘンリー・アライの伯母。

////【カナダ】////

●カナダ国防軍・統合作戦司令部

アイコ・ルグラン 陸軍少佐。日本人の母を持ち、陸自の指揮幕僚
過程修了。

イチロー・カワイ 陸軍軍曹。日系三世。

////【ロシア】////

●海軍航空隊 ツポレフ-95 RT “ベア”

ボリス・イオノフ 中佐。航空機関士。

ヴィクトル・エフゲニフ 大尉。機長。

////【中国】////

●人民解放軍海軍

《東征艦隊》空母 “福建” (八〇〇〇〇トン)

賀一智 海軍中將。艦隊司令官。

万通 海軍少將。参謀長。

顔昭林 海軍大佐。航空参謀。

杜柏霖 海軍大佐。情報参謀。

黄誠 海軍大佐。政治将校。

徐宝竜 海軍中佐。フリゲイト “九江” 艦長。

張凱 海軍少佐。“九江” 副長。

唐慶林 海軍中佐。フリゲイト “宜興” 艦長。

馬東明 海軍中佐。フリゲイト “日照” 艦長。

《海軍陸戦隊》075型揚陸艦 “海南” (四七〇〇〇トン)

楊孝賢 海軍中佐。隊長。

王高遠 海軍少佐。副隊長。

張旭光 海軍大尉。小隊長。

アメリカ陥落4 東太平洋の荒波

プロローグ

テキサス州ダラスから南へ八〇マイル下ったマクレナン郡ウェーコ。人口一三万人。テキサス州を構成する自治体としては、大きくもなく小さくもないありふれた街だ。

全米的には、一九九三年に発生した、カルト教団と連邦捜査局^{FBI}の攻防戦となったウェーコ事件の街として記憶される。ATF、アルコール・タバコ・火器及び爆発物取締局の捜査官四名と、八〇名を超える信者が死亡し、教団施設を包囲したFBIは、世論や議会の批判に晒され、FBIの歴史に残る一大汚点となり、後に数多の刑事ドラマに素材を提供することとなった。

最高気温は、春先から半年にもわたって華氏一〇〇度を超える。というより、ここには春や秋はない。ほんの二、三ヶ月の冬から一気に真夏へと移行するのだ。

今、街を出て南へと走るハイウェイ6号線は、分岐して東へと向かう164号線と別れた辺りで、少し渋滞が緩和された。

渋滞と言っても、ウェーコを通過してダラスへと向かう上りルートのみだ。ここから南へ下り、大都市ヒューストンへと向かう車は、ほとんどがトラック他の営業車だった。

この辺りは、土地の起伏はなく、三六〇度どこ

を見渡してもフラットで殺風景な景色だ。だが文明が無いわけではない。ほとんどの土地は耕作地として耕されている。

暑いのは仕方無い。それがテキサスだ。そして、この辺りはまたハリケーンとトルネードの発生地帯でもある。ドライバーは常に後ろも警戒し、ラジオのトルネード警報にも注意する必要がある。東洋人家族が乗る一台のヒュンダイ・ソナタが

南へと向かっていた。テキサス州西部のスウィートウォーターという小さな町を出発した。ソナタは、いったんダラスへと向かったが、ダラス市内へと向かう酷い渋滞に巻き込まれて身動きが取れなくなった。

ガソリンも底を突きかけ、給油所の長い行列に並んでまた時間を浪費し、ようやくここまで辿り着いた。何のトラブルもなければ、たぶん半日もかからないだろうここまで、二日も足止めを食ら

い、車中泊で三日目の朝を迎えていた。

今日も朝からすでに気温は、華氏一〇〇度を超えている。

日本人のレストラン経営者、ジョーイ・西山にしやまと西山穰じょういち一は、華氏一〇〇度を、だいたい摂氏四〇度と覚えていた。正確には摂氏三七・八度だが、似たようなものだ。一時間もしないうちに摂氏四〇度を超えることだろう。

車を出るのは億劫になるし、車のエアコンが止まるのは恐怖だ。燃料切れは、真夏のテキサスでは間違い無く脱水症に陥ることを意味する。燃料が尽きそうになったら、せめてどこか木陰を探してハイウェイから脱出するしかなかった。

助手席には妻のソウン・キム。元は在日韓国人だが、十代で渡米した彼女はすでにアメリカ国籍を持つし、英語も問題無い。息子の千代丸ちよまるは、まだ幼いので、日本語がメインだ。そのことで、ソ

ユンとはしよつちゆう喧嘩になる。

別に日本人学校に通わせるわけではないのだからと、ソンは、子供と話すときは英語に限るべきだといつも主張していた。

だが、夫婦の会話はいつも日本語メインだった。アメリカは、今壊死しかけていた。大統領選挙の有効性を巡る各州の大陪審判決が同日に出そろった途端、各地で暴動が発生した。ワシントンD Cは催涙ガスで満ち、議事堂は焼け落ちた。大統領はホワイトハウスの地下に留まっていたが、そのホワイトハウスの治安は、英国から派遣された英国軍海兵隊によって守られている。

そしてニューヨーク・マンハッタン島は、略奪の街と化し、橋は焼け落ち、島外へと出るトンネルは黒煙を吐き出し、命からがら島を逃げ出す住民は、辛うじて運行している定期船乗り場まで、決死の脱出行を強いられていた。

全米の送電網が破壊され、電気がある州は限られる。カリフォルニア州は停電しているし、もちろん東部各州も。

それなりの規模の州で唯一、電力が維持されているのは、ここテキサス州のみだった。潤沢な税収を元にした長年のインフラ投資のお陰だった。携帯も、州外との接続は難しいが、州内ではそこそこ通じる。問題はインターネットで、メールはまず使えないし、検索サイトも落ちている。州政府は、ラジオなどで州政府の広報を聴くように訴えていた。

電気がある、則ち文明社会が残っているということ、ここテキサスは全米から避難民が殺到していた。許可のない航空機が強行着陸して炎上事故も起こせば、避難所が溢れかえり、州知事は、一時的に州境の封鎖も命じていた。

アメリカ軍内部にも民主共和の対立があること

から、アメリカ軍の陸海空海兵隊部隊のほとんどが出勤を禁じられていた。

どこの州でも、治安維持はもっぱら州兵に頼っている。だが、ここテキサスは、他の州から見れば天国には違いなかった。彼らは、もっぱら避難民の受け入れに頭を悩ますだけで、この異常気象が続く真夏に、エアコンの心配をする必要は無かったし、大規模停電のせいで、エアコンや上下水道が止まることも心配せずに済んだ。

ニューヨークでもロスアンゼルスでも、それらはすでに動いていないのだ。アメリカ人の八、九割が、この一週間、安全な水と、清潔なトイレ、通信ネットワーク、そして何より電気の無い暮らしを強いられていた。

だが、ここテキサスには、ガソリンも、あるにはあった。避難民が殺到したことで、その入手に支障を来しつつあったが、州政府は繰り返し、こ

こテキサスは石油の産地で、精製所も十分に操業を維持していると広報していた。

もっとも現実として、路肩で乗り捨てられる乗用車は増えていた。ガソリンを巡って銃声が聞こえてくることも一度や二度では無い。

ハンドルを握る西山も、夜間の走行は諦めるしかなかった。しかも、ガソリンはつねにカツカツの状態だ。

このまま、せめてダラスへと引き返すべきだったが、その燃料も無かった。

ノロノロ運転する対向車のドライバーたちが、ある一点を見詰めていることにソユンが気付いて、助手席から後ろを振り返った。黒い筋が、地面から空へと伸びている。

「信じられない！ こんな時間から竜巻が起こるなんて」

「日本じゃ、夜中にだって竜巻は起こっていたと

思うぞ。こつちに来そうなのか？」

「竜巻警報も当てにならないわね。こんな田舎のことまで注意しちやくれなない」

西山家は、ローンを組んで買ったばかりの家を、つい一週間前に竜巻で失った。西山は、自分の愛車まで吹き飛ばされて、今は仕方無くこうして妻の車に乗っているのだ。賃貸物件で経営しているレストランを除けば、この型落ちの中古ソナタが、ほとんど唯一の西山家の財産と言って良かった。「こつちに向かってきそうか？」西山は二度、同じことを聞いた。

「左右にぶれているようには見えないわよ……」
 ということは、こちらに直進してくるといふことだ。下りは流れてはいるものの、右側は線路があり、どこでも右折が出来る道ではない。逃げるようになったら、どこかで上り車線を横切って左に逃げるしかない。

前を走っていた車両が何台か、そうやって左折していった。

「どうすんのよ！」

西山は、減速しながらバックミラーをちらちら覗き込んだ。

「左折準備しつつ、路肩に外れて止まろう——」
 そんなに大きな竜巻じゃない。少なくとも、自宅を破壊した竜巻ほどじゃなかった。そのお陰で、中古で買った家の壁に、死体が埋め込まれていたことが判明したが。

ここはアメリカだ。FBIまでやってきたが、その犯人が見つかることはないだろうと思った。

路肩に止め、エンジンは切らずにおいた。晴れていた空がだんだんと薄暗くなり、雨粒がフロントガラスに落ちてくる。

後部座席の千代丸のチャイルドシートを確認し、西山は、背後から迫る竜巻をじっと睨み付けた。

「ずれている、ちよびつとだけどずれているぞ！」

「本当に？」

「ほら、東へとずれている」

道路に沿って走る電線が激しくなっている。

こりゃ停電は避けられないなと思った。

藤田スケールで言えば、そんなに大きくないと思つた。F2くらいの規模だ。自宅を襲つた竜巻は、間違い無くF5の最強クラスだった。

風が激しく車体を揺らし始めた。窓が割れそうなほど横殴りの雨粒が叩きつける。だが、ソナタは持ち堪えた。竜巻は、二キロかそこいら逸れて東へと移動していった。

「で、どうするのよ？ 残りのガソリンじゃ、ヒューストンの半分までも走れないわよ。ガス・ステーションはどこも長蛇の列だし……」

所々に、黒焦げの車が放置されている。たぶん

ガソリンの給油に失敗して炎上したのだろう。この炎天下ではあつという間にガソリンは気化して、何かの弾みに着火する。

「ヒューストンに近づけば、ガス・ステーションも余裕があると思うぞ。とにかく、行ける所まで行くしか無い」

車を出そうとした瞬間、ピックアップ・トラックが一台現れ、前方を塞ぐように斜めに入ってきて止まった。荷台には、ドーム状のタンクが乗せてある。白く塗られ、大きく「MILK」と描かれているが、どう考えても、中身が牛乳には思えなかった。

「こういう車を何台も見掛けたけど、あれ絶対、牛乳じゃないわよね……」

「ああ、そうだな。いくらふっかけてくるつもりだろう」

Tシャツに短パン、白髪頭の老人が、カウボー

イ・ハットを被りながら運転席から降りてくる。アジア系の小柄な老人だった。腰には、ごついリボルバー拳銃を下げていた。

西山は、運転席の窓を少し下げた。妻は、ダッシュボードに隠し持ったピストルのことを一瞬考えた。レストランの板前さんから譲り受けたものだ。

サングラスを外した老人は、「あんたたち韓国人か？」と尋ねてきた。

西山は、それには答えず直球で「いくら？^{ハウマツチ}」と聞いたが、妻は「イエス！」と同時に答えた。

「心配するな。子連れの同胞から金は取らん。この数日、たっぷり儲けさせてもらったから。ここは目立つ。その林で右折して線路を渡ってくれ。付いてこい！」

老人は、後部座席の千代丸に手を振りながらそう言っただけで自分の車に戻った。

ソユンは、ほっと胸を撫で下ろした。

右折して林の影に入ると、エンジンを止め、二人は外に出た。

「こういう車というか燃料車は、違法ですよね？」とソユンが恐る恐る聞いた。

「ああ。でもアメリカって所はさ、この腰のピストルのオープン・キャリーみたいに、抜け道はいつも探せるものさ。アメリカのいくつかの州では、オープン・キャリーのライセンスさえ取れば、こうやって白昼堂々とピストルを持って街を歩ける。俺は持って無いけどね。でも、このタイプの車を見掛けたら、近寄らない方がよいぞ。タンクはそれなりに頑丈に作ってあるが、玉突き衝突にでも巻き込まれたら、ガソリンがあつという間に漏れ出して、ドカン！ だ。ボン！ じゃなくドカン！ と爆発する。素人があちこちで車同士で給油しているせいで、火が点いている。ここは、

石油の州だが、こう暑くなると、ガソリン車はもう危険だな」

「どうして韓国人だと？」

「日本人は韓国車には乗らないだろう。日系人も割と避ける。中国系は金持ちが多いから、ここいらじゃドイツ車だな。あんたもアメリカで産まれたわけじゃなさそうだが」

ソユンは自己紹介し、避難してくる旦那の友人家族を出迎えに、スウィートウォーターから州外へ向かっていることを教えた。

「州外って、どの辺りまでだ？」

「ルイジアナを通って、ミシシッピ州辺りまで」

「そりゃ無茶だ！」と老人は笑った。

「ミシシッピなんて、燃料を巡って殺し合いになっているという噂だ。うちの業界で、どうにか隣のルイジアナまで燃料を運べないかといろいろやっているが、現状じゃ、州内に殺到する避難民に

食わせるので精一杯だな」

アンソニー・キムと名乗った老人は、ガス・ステーションを四軒経営する韓国系アメリカ人で、ベトナム戦争前に移民として一家で渡米してきた。親はクリーニング店からスタートし、息子の自分はやっとここまで来た。

経営するガス・ステーションでは、法外な価格を取り締まる州政府からの厳しい通達と監視があるので、こうやってバイトして稼いでいる。実際、燃料が切れて立ち往生する車は後を絶たないので、警察も黙認しているという話だった。

今朝は二巡目の商売に出かける途中で、ガラスからの下り車線を走って止まっている韓国車は変だと思つたらしい。上り車線を走って路肩で商売を始めると、たちまち行列が出来て目立つし危険なので、今は一台一台誘導して物陰で給油することになっているとのことだった。

このタンクひとつ分で、数日分の店舗の売り上げがあるとの話で、相当にふっかけているらしい。

車の燃費は年々改善され、ハイブリッド車や電気自動車も流行る。この商売に未来はないことはわかり切っていたから、息子たちには継がせなかったということだ。

ソユンは、自分の店の名刺を手渡した。老人も名刺を差し出す。

「裏面に四軒分の小さな地図が入っている。ヒューストンの街外れにも一軒ある。もし帰りにそこまで辿り着けるようなら、後の心配は要らない。韓国車には優先して給油するよう命じてある。もしその時まで、携帯が通じるようなら、私に電話してくれ。州境だろうと、ガス欠なら誰かを迎えにやらせるよ。気を付けろ。とにかく、テキサスは避難民で溢れかえっている。この状況で大停電にでもなったら、一気に治安は悪化する。そうな

ったらむしろ、州外に留まってじっとしてる方が安全かも知れない」

老人は、結局、車を満タンにしてくれて去っていった。

「さて……、これでどの辺りまで行ける？」

と西山はソユンに聞いた。ナビ・システムはあったが、サーバーがダウンしているらしく、記憶メモリに入った地図しか表示されない。

ソユンはそのマップを東へと移動させた。

「このノロノロ運転で走ったとしても、たぶんルイジアナの東端のニューオリンズまで辿り着いて、テキサスの州境まで戻ってこられる感じかしら……。でも、肝心のタシロさんと連絡が取れないんじゃない、どこでどう落ち合うのよ？ もうすれ違っているかも知れない」

「州内は携帯も固定電話も使える。テキサス州まで辿り着けば電話をくれるさ。それが無理でも、

当てはある。会社員時代に、二人で回った工場とかに向かうはずだ」

「そう事前に決めたわけじゃないんでしょ？」

「俺ならそうする。奴もそうするさ！」

エンジンを掛ける。ラジオを点けて最新のニュースを聞かすが、入ってくるのはもっぱら州内の情報だけで、州の外がどうなっているのかは全く情報が無かった。

時々、避難民に向けて、受け入れ可能な避難所の場所をアナウンスしていたが、州政府の公式な立場としては、これ以上の受け入れは不可能なので、テキサス州へ向かうのは止めてくれと訴えていた。空港は閉鎖されているし、州外とを結ぶ幹線道路は、警察によって時々閉鎖されるゲート・コントロールが行われていた。

アメリカ政府が統治機能を失ってから、すでに

一週間が経過していた。アメリカ全土で、盗まれた選挙^グによる偽者の大統領の追放を叫ぶ通称^グ99.パーセント^グ、あるいは^グセル^グを自称するネオコンに煽られた暴徒たちが暴れ回っていた。

ここテキサスは、もともと共和党の地盤だが、幸い電力と通信インフラが無事なお陰で、辛うじて平和が保たれている。だが西海岸の沖では、中国海軍の空母機動部隊が活動し、出動を禁じられたアメリカ軍に代わり、自衛隊がそれらの抑制と、各州での治安活動に当たっていた。

日本政府は、アメリカ政府から、無制限最大規模の軍事的援助を要請されていた。だが、初期出動可能な部隊は限られ、対する暴徒の数はあまりにも多すぎた。

第一章 コロラド・スプリングス

陸上自衛隊第1空挺団第403本部管理中隊・その実、特殊作戦群特殊部隊「サイレント・コア」を率いる土門康平陸将補を乗せた航空自衛隊のC-2輸送機は、標高二〇〇〇メートルに位置するコロラドコロラド・スプリングス米空軍士官学校飛行場に着陸するため、高度を落とし始めていた。ロスアンゼルス、NASポイント・マゲー海軍飛行場から往復四時間の移動だった。そのC-2輸送機は、ラピッド・ドラゴンと呼ばれる対地攻撃ミサイル・システムを機内に搭載していたため、ジャズム・ワングのコールサインを与えられていた。

今も、そのミサイルが三発入った六発用のコンテナを搭載したままだった。

機内後方には、死体袋が一つ置かれていた。LAX、ロスアンゼルス国際空港を守る韓国軍部隊を指揮していた柳輝昭韓国陸軍退役少将の亡骸が入っていた。末期癌による自然死だったが、部隊とは少なからず縁があった人物ということで、土門自らが、その遺体に付き添うことにした。そして、土門以上に因縁があった、部隊ナンバー2の姜彩夏かんあやか二佐も乗っていた。だが二人とも制服姿ではなく、戦闘服姿だった。

手ぶらで降りるわけにはいかなかったので、パ

レット一つ分の支援物資も搭載していた。日本から運んだ、主に医療物資だった。

もとは陸軍航空隊としてスタートした米空軍士官学校は、コロラド州第二の都市の北に位置する。その飛行場の滑走路は短く、一三〇〇メートルしかない。しかも空気が薄いこの標高では、機体の低速性能と、パイロットの技量が求められる。民航の旅客機が離着陸できる長さではなかった。

だがもちろん、短距離離着陸性能に優れるC-2輸送機なら問題はない。着陸すると、まずそれなりの棺桶が、士官学校の学生らによって機内に運び込まれた。士官学校側は、韓国国旗と儀仗兵まで用意してくれていた。国旗が棺に掛けられ、儀仗兵に担がれて機体から降りる。その棺桶を担ぐ一人は、娘婿としてここで朝鮮戦争空戦史を教える韓国空軍中佐だった。

土門は、喪服を着た遺族にはんの一言半句を伝

えただけだったが、姜二佐は、強ばった表情で、自分がかつて韓国陸軍軍人であり、お父上を直接知る立場にあったことを告白した。

「ああ、あの騒動の時の……」と遺族も複雑な反応だった。しかし一瞬間を置いて、「父も貴方に看取ってもらえたのなら本望だったことでしょう」と頷いた。

小学生くらいの、柳將軍の孫も二人そこにいた。妻を亡くしてまだ日が浅い將軍は、ほんの一週間前、ここで家族とのひとときを過ごしたばかりだった。

韓国軍では、兵役経験者を率いて戦った陸軍参謀本部作戦課長のエリート大佐が一人戦死していた。

空から強行着陸し、ターミナルに押し入ってきたブラジルのカルテルはアサルト・ライフルやRPGまで持つ強武装で、薬物を服用して抑制も効

かず、次々と避難民を殺戮し始めた。駆けつけた

自衛隊も手数で及ばず、ターミナルの端っこに留まる邦人避難民を守るのが精一杯だったが、自国民保護を名目に突然現れた中国海軍の海軍陸戦隊や、地元のリョウランティア・グループの加勢も得てどうにか敵の排除に成功していた。そこにアメリカ軍兵士は一人もいなかった。もともとそこには空港警備部隊も潰滅した後だった。

土門らが飛行場に留まったのは、ほんの一五分だった。棺が車に載せられ、遺族とともに走り去っていく姿を敬礼で見送ると、土門は機内へと引き返した。

暑かった……。

「高度二〇〇〇メートルの午前中だというのに、もう摂氏三〇度越えだそうだ」

壁際のキャンバス地のシートに腰を下ろすと、

姜二佐は「そうですね……」と虚ろな表情で応じ

た。

「ナンバー・ツー。一度しか聞かないが、大丈夫だろうな？」

「ええ。もちろんです。全て終わったこと、過去のことですから」

「そう願うよ。この件は終わりだ」

この飛行場からほんの三〇キロ南に、シャイアン・マウンテン空軍基地がある。かつて北米防空司令部^{N O R A D}がその山中にあった場所だ。部隊自体はすでに近くに引越した後だ。街を挟んで東側にあるピーターソン空軍基地へと移動していたが、ここは地下深い施設で敵の電磁波攻撃に強いということ、今もあれこれ秘密めいた施設が置かれているという噂だった。いずれにせよ、空軍士官学校から南は制限空域なので、機体は北へ向かって離陸した。

土門は事前に、西海岸からコロラド・スプリン

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。